

イスラエルを合わせ鏡として 日本の今を再考してほしい

1998年11月号の「農業経営者ルポ」に登場した中村泰明さんの現在を土下信人さんにご紹介いただいた。世界の農業経営者や業界関係者との交流の中で得た最先端の技術知識だけではなく、官主導の日本農業界から自由に羽ばたいていた中村さんの今は、さらにその羽を広げてコロナ禍の困難を越えて新たな仕事に取り組んでいる。

土下さんは中村さんを介して知っていた方。同氏は名古屋大学農学部卒業後に日本で初めての組織培養の技術を使ったメリクロン苗の生産事業を立ち上げ、沖縄や台湾などでも組織培養事業やその技術指導に活躍された。中国各地での農業コンサルタントや農場経営にとどま

らない様々な事業に取り組みながら、本誌上にもたびたび寄稿をお願いしてきた。そんな土下さん

と初めてお目にかかったのは、中村さんをルポで紹介した翌年の99年中村さんをコーディネーターにお願いして当社が主催したイスラエルツアーの時だった。

そのツアーの様子を「日本と日本農業を見る『合わせ鏡』としてのイ

スラエル」99年11月号の特集として紹介している。実は、土下さんの今回の原稿を読みながら僕もこの懐かしいイスラエルツアーを伝える特集を改めて読んで、多くの皆様に紹介したいと思った。

その特集の前文にこんな記事を書いた。長くなるが引用する。

「イスラエルで我々は、ほんの僅かな人々と出会い、その農業と社会を垣間見たに過ぎない。それでも、彼の国の人々が持つ農業技術や農業経営に取り組む姿には、彼らの自然観や国家観あるいはビジネス観にもつながる一つの原理が貫かれていることに気付かされた。それは日本の対局にあるといってもよい国と人々と農業の姿だった。そして、その旅行は我々に、改めて日本人や日本という国そして日本農業を見つめ直させる。『合わせ鏡』を与えてくれる体験でもあった。

単一民族の島国に住み、豊かな水と自然の恵みに抱かれた風土を持つ日本。その国の国民の内、国や家族を守るために自ら銃を持つ者がどれだけののだろうか。そこまで言わずとも、それだけの国民が明確な国家意識や自らのアイデンティティや

誇りを語るのだろうか。さらに、我々日本人そして農業界やその関連業界では、いまだに開発途上国か社会主義国家を思わせる『官の支配』に甘え、外の世界の現実を直視することも自らを鍛え戦う勇氣も持とうとせず、ただ城壁を高くして『隔離され支配される安心』の中で明日のない居場所探しをしようとしているとは言えないか。

それに対して、そもそも人がそこに生きることを拒んでいるかのような厳しいイスラエルの風土や自然。ユダヤ教徒の自決による建国そして生存と国家の存亡を賭けた国民自身の戦いによって守り抜いてきた『平和』。しかも、自らの生存を脅かす異教徒に囲まれながら厳しい対立関係の中でタフに相手の存在すら認めず、ひ弱な日本と日本人の姿が一層際だって見えてくるのだった。」

宿泊地のテイベリアではすぐ傍で爆弾テロがあったのも知らず飲み屋でワイン片手に氣勢を上げていたりした我々ではあったが、僕自身を含めてツアー参加者たちに与えた感銘は深かった。中村さん、土下さんにもご寄稿いただいている内容は、きっと今回のご紹介をもう一步深めてくれると思う。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。